読者参加G(ゲーム)ノベル

爆れつハンター Special

第5話 完成!?恋の三角形?



あかほりさとる

イラスト／臣士れい


10/3テレビ東京系
TVアニメ放送開始!!
次ページで
TVアニメ
キャラ設定大紹介!!

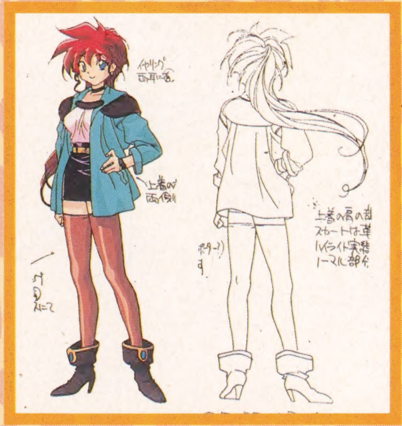
爆れつハンター TVアニメ

キャスティング&キャラ設定 大紹介!!

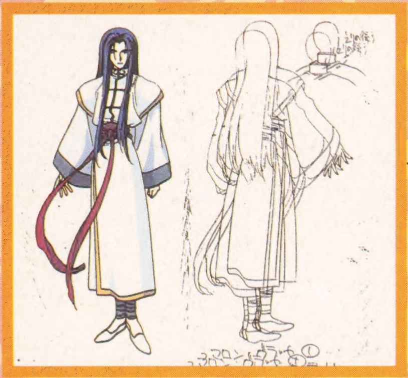
ついに発表となった「爆れつハンター」TVアニメのキャスティング。期待通りラジオドラマやCDと同じ声優陣となって、安心したファンも多いんじゃないかな。先月発表した制作スタッフの陣容も含め、これで原作のノリそのままの、楽しい作品に仕上がるカギが全てそろったって感じだよね。テレビ東京系全国6局ネットで放送されるこのTVアニメ「爆れつハンター」。第1回目のオンエアは、10月3日の夕方6時から。何がなんでも見逃すなよ!!



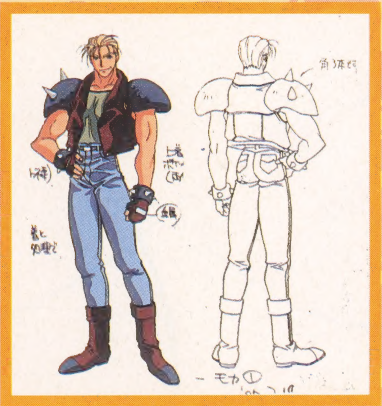
キャロット=グラッセ
(CV=古本新之輔)
その素顔も、キャロとそっくりと評判の古本新之輔さんが、またまた大暴れ!!



ティラ=ミス
(CV=林原めぐみ)
かわいくて色っぽいティラは、やっぱり林原さんだよね。コスチュームも気になるところ。



マロン=グラッセ
(CV=真殿光昭)
美形を演じさせたらこの人!マロン人気の秘密のひとつは、真殿さんの、透明感ある声質。



ガトー=モカ
(CV=梁田浩之)
最近は素顔もマッチョというウワサの梁田浩之さん。……ホント!?

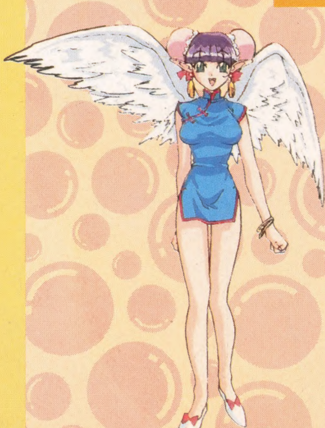


ショコラ=ミス
(CV=水谷優子)
本誌エッセイでもおなじみの水谷優子さん。大人の魅力を振りまいてくれそう(!?)

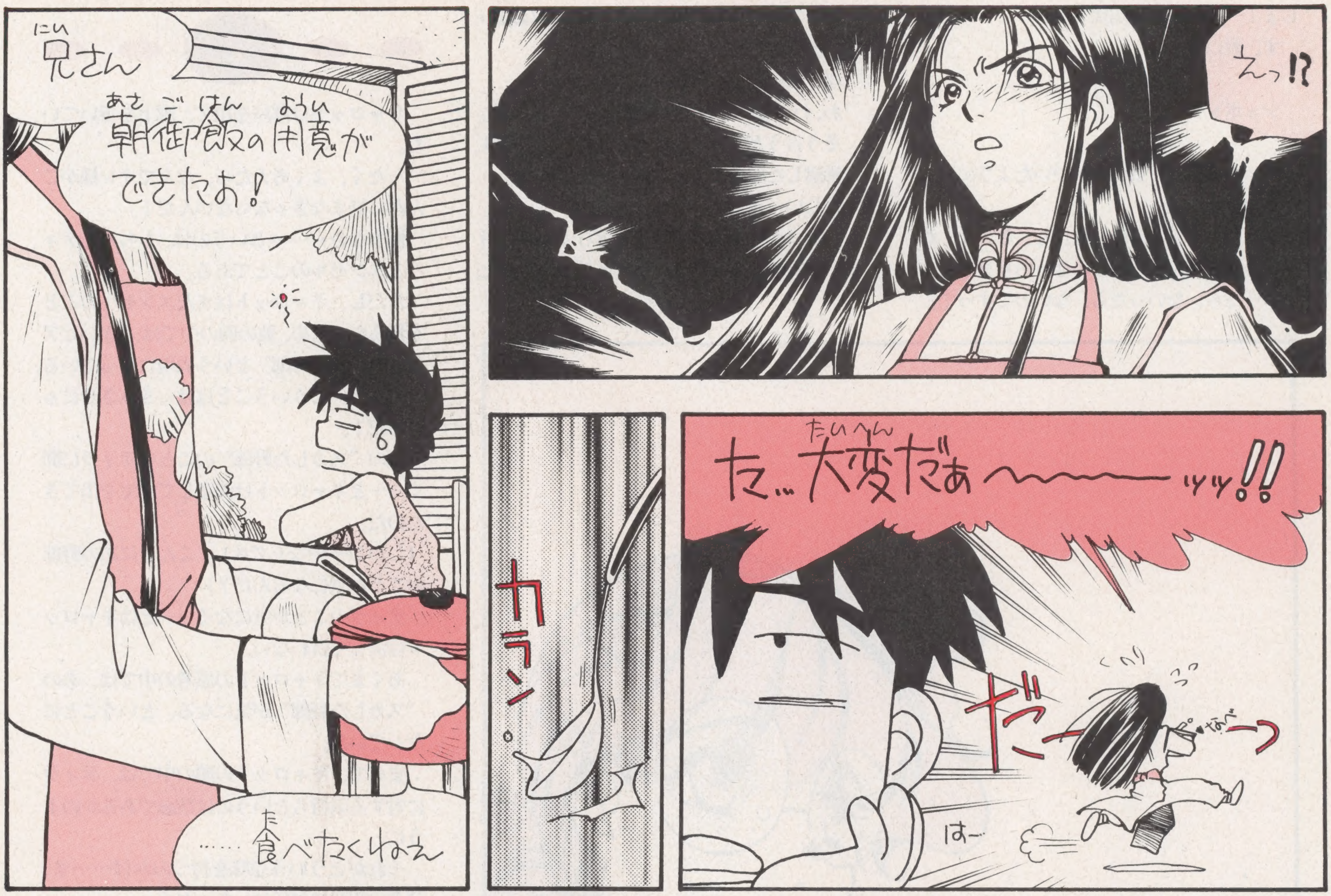


最新刊 10月10日 発売!!

シリーズ最新刊の「ソーサラー狩り　爆れつハンター⑤魔人形」も10月10日に発売されるぞ!!　アニメだけじゃなくコミック、小説と、この秋も爆れつはお祭り騒ぎっぱなし!!



10月3日(火) 夕方6時00分~ TX系(テレビ東京)にてオンエア開始!!



1

ぽぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ…………

朝からキャロットはポカンと口を開けたままの状態だった。

いや、もっと前、昨日の夜からだ。

原因はもちろん、プールであのティラとエンゼルの抱擁を見てしまったためであることは疑いない。

「兄さん?」

マロンが心配そうにキャロットに声をかけるが、返事はない。

まったくもって、外部からの刺激に対し、まるで反応がないのだ。

「兄さん!」

「…………」

「兄さん、朝御飯の用意ができたよ!」

『朝御飯』という単語に、ようやくキャロットがマロンのほうを向いた。

マロンは少しホッとした表情になる。

ところがその表情は長くは続かなかった。

「……食べたくねえ」

「えっ!?」

カラン……

マロンは、スープをよそおうと持っていたお玉を思わず落としてしまう。

「そ、そんな! 兄さんがご飯を食べないなんて!」

キャロットと暮らして十六年。

たとえ高熱を発していようが、ご飯だけは餓鬼のごとく貪り食ったあのキャロットの口から、「食べたくない」の一言。

「た、大変だぁ〜!」

日頃の冷静さもどこへやら。

周章狼狽、パニックに陥ったマロンは大声で叫びながら走り回っていた。

なぜか、スープの鍋を持ったまま……。

一方、ティラのほうもこれまた朝からボーッとしていた。

「はぁぁぁぁ……」

深く、深くタメ息をつく。

ショコラがあきれた顔で言った。

「もう、ティラ、昨日プールから帰ってから、あんた変よ!」

「えっ……?」

やはり反応は鈍い。

「なんかあったの?」

「いえ、別に……」

ティラのおかしな原因も、これまたあのエンゼルとの抱擁だ。

(私ったら、あんなことを……)

そのときのことを思い出して、ティラは思わず頬を染めた。

そんなティラの変化を見て、ショコラが怪訝な表情をする。

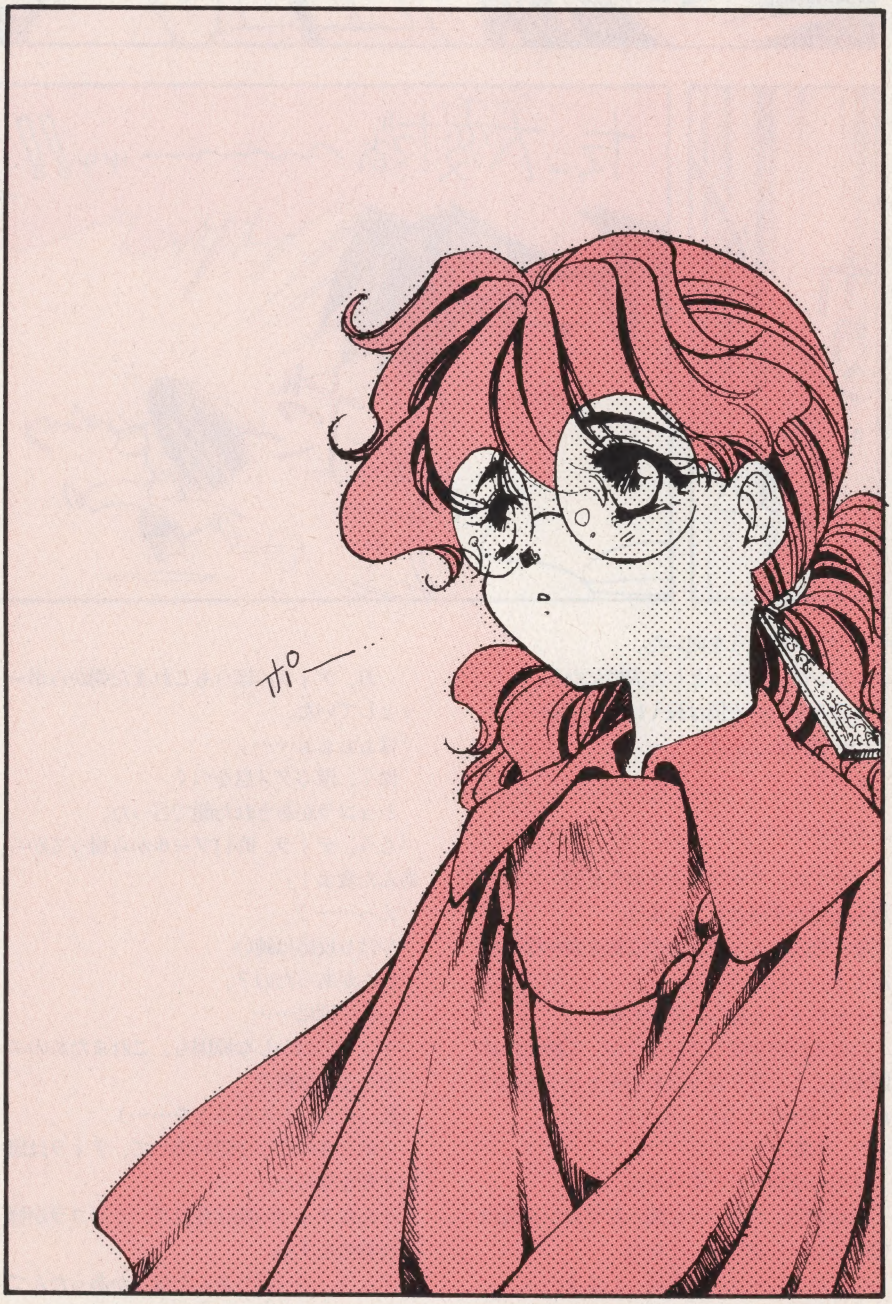
「ティラ、やっぱりあんたなんかあったんで

しょ！　しかも、男関係で！」
　す、鋭い！

　シュボッ！

　ティラの顔は一気に火がついたように真っ赤になった。
「な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、何もありません！　あるわきゃありません！ないったら、ないったら、ないのですっ！」

　凄まじいティラの剣幕に、ショコラは思わず気圧(けお)されて言う。
「な、ないんなら別にいいけど……」
「わ、わかってもらえればそれでいいんです」
　そう言うと、ティラはふらふらした足取りで沸騰した顔のまま、部屋を出ていった。
「怪しい……」
　ショコラは腕組みするとしばらくの間、出ていったティラのほうをじっと見つめていた。



2

　キャロットは部屋を出て、廊下を歩いていた。
「ったく、よく考えたら、なんでオレ様がこんなに悩まなきゃならないんだ！」
　悩まなきゃ……というのは、もちろんティラとエンゼルのことである。
　ただし、キャロットはまだエンゼルのことを知らないため、彼の頭の中では、〝赤いピアスのスカした野郎〟という表現になっている。
「やっぱ、こういうことははっきりさせにゃだめだ！」
　あの〝スカした野郎〟のことをティラに聞く——とキャロットは決意して部屋を出てきたのだ。
（しかし……なんでオレ、こんなにあの野郎のことが気になるんだ？）
　ティラのことが気になる——とはキャロットは決して言わない。
　あくまでキャロットの思考の中では、あの〝スカした野郎〟が気になる、ということになっていた。
　まるで、キャロットの頭の中では、ティラに対する気持ちというのは禁忌(タブー)であるかのように。
　それがどういう意味を持つのかは……ま、読者の想像にお任せしちゃおう。
　ただ、キャロット自身は読者が期待するような認識は一度も持ったことがないし、はっきり言って、自分でもよくわかってないのだった。
「ともかく、ティラに聞いてはっきりさせるぜ！」
　キャロットは勇んでティラの部屋に向かっていた。

　ティラのほうもあのまま廊下を歩いていた。
（私、どうしてしまったのかしら……）
　こっちはこっちで重傷だ。
（エンゼル……なんだか…な……）
　ティラ自身、エンゼルに対する気持ちはよくわからない。
　実は、ティラは男性に対してはかなり奥手なのである。
　あんなSMスタイルをするくせに……と思うかもしれないが、男性と抱き合ったなぞということは、ほとんど初体験なのだ。



免疫がないから、こんなふうになっちゃった――ティラは必死にそう思おうとしていた。

無理にでもそう思わなければならなかった。

なぜなら、そう思わなければ、今までずっと心の奥底にしまっていた自分の想いを裏切ることになる。

自分の想い――キャロへの想い――

「ふぅ……」

ティラは、キャロットのことが好きな自分というものを裏切るのがすごく怖いのだ。

そんな状況にもし万が一置かれてしまったら、どうしていいのかわからない。

エンゼルに対するこのドキドキした想いは、あくまで自分の免疫のなさのため――

ティラはそれを確認するために、今すぐどうしてもキャロットに会わなければならなかった。

（ともかくキャロに会って……そして……）

ティラはキャロの部屋へと急いでいた。

二人がまったく同時にお互いの部屋に向かったらどうなるか。

しかも、キャロットとティラの部屋の最短距離はたった一つの道順しかない。

そうなると、結果は火を見るより明らかだ。

ドンッ！

「わわわわわっ！」

「きゃああ！」

期待通り、二人は廊下の曲がり角で出会い頭にぶつかってしまった。

「あ……」

「い……」

突然の出逢いに、先ほどまでの思惑もどこへやら、二人の頭の中は完全に真っ白になってしまう。

「う……」

「え……」

四六のガマでもないのに、脂汗をダラダラ垂らしたまま、二人の身体は完全に硬直した。

思考回路すら停止してしまっている。

だめだ、こりゃ。

「お……お……お……」

ア行の最後の音をお互いに声に出して、二人はしばらくの間、見つめ合ったまま動かなかった。いや、動けなかった。

「はら？　なにしてんの？」

偶然通りかかったドーターが声をかけなかったら、二人は永遠にそのままだったかもしれない。

「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！」

ドーターの声で呪縛が解けた二人は、悲鳴をあげて逃げ出した。

「いっ!?」

突然の悲鳴に驚いたのはドーターだ。

廊下の壁にピッタリくっついて、汗ジトのままドーターはつぶやいた。

「な、なんなの、いったい……？」

3

すわぁて、こちらはサカナヤ山脈のフィッシュ一族の本拠地。

いいかげん飽きたとお思いでしょうが、今日も懲りずにゼリー・フィッシュとオータム&ソード・フィッシュが、フィッシュ一族総帥で父親であるフィレオ・フィッシュ公爵の前でやいのやいの言い合っていた。

「お兄様、下がっててください！　今回こそは私が世界征服を！」

「え～い、おまえは前回失敗しただろう！　今回は私の番だ！」

「ソードちゃんも、ソードちゃんもちゃんと参加するぅ！」

ギャイギャイと本気でうるさい。

ガタッ！

「え～い、静かにせんか！」

公爵が一喝し、思わず三人は気をつけの姿勢になる。

珍しく公爵が威厳をもって言った。

「いつもいつもくだらぬことでもめるでない」

「しかし、父上……」

「しかしもかかしもぬわぁい！　よい！　ならば今回はわしが決めてやろう！」

公爵の目は真剣だった。

「ゴクッ……」

ゼリーもオータムもソードまでもがじっと公爵を見つめる。

ハンターリスト



キャロット=グラッセ

爆れつハンターのリーダーながら、その性格はご存じの通りスケベでノー天気で超お調子者。魔法を受けると牛魔獣など獣人化する。



ティラ=ミス

慈愛に満ちた眼差しが、封印を解かれたとたん、恐怖のSM女王の眼光に変わる。キャロットに密かに恋心を持っている。



マロン=グラッセ

東方魔術の達人にして冷静沈着、兄のキャロットとは正反対の性格である。だが、実は強度のブラザーコンプレックスでもある。



ショコラ=ミス

好きな男には一直線！　妹のティラとはこちらも正反対の性格。しかしSM女王様化した後の怖さは、まさに姉妹！　の恐ろしさ。

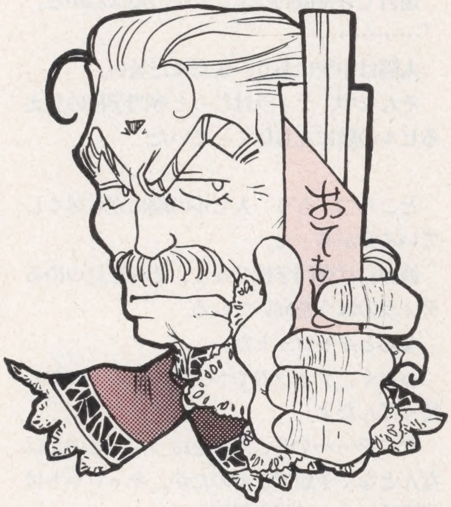
爆れつ場外乱暴!!

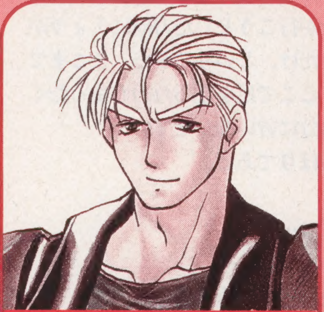
「空海と最澄、朝食を食らう…。"空海どの…ご飯さいっちょに食うかい?" おそまつでした」（愛媛県・23日はふみの日）　ギャハハハ "いっちょ" って何だよ～。それにコイツいったいどこの言葉使ってるんだ!?　まあでもかなりおもしろいよな、コレ。掲載２回目の「23日～」はキングに最接近だな。

はたして公爵はいかなる選別法を使うというのであろうか!?
経験？　戦力判断？　いやいや、伝統に裏打ちされた占星術による占いというのもある。
カッと公爵の目が見開かれた。
そして、おもむろに懐に手を入れる。
公爵が懐から取り出したのは――割り箸!?

パタッ……

床に立てた割り箸がゼリーのほうに倒れる。
「厳正なる審査の結果、今回はゼリーにまかせることが決まった！」
「のわっ！」
全員がその場にズッコケた。





ガトー＝モカ

美に対する執着は、まさに病的。おのが肉体にもそれを求め、結果的に、物理攻撃としては究極の肉体を手に入れた法族狩り。



4

帝都ファザードにはいくつも公園があるが、その中でも“世界庭園”の異名をとるヤーレン公園がもっとも大きかった。
ここはカップルのメッカでもあり、まだ幼いカップルから、イッちゃってるヤンキーなカップル、はたまたフルムーンなカップルまで、多種多様なカップルが日々愛を語り合うことでも有名だった。
欠点は、独り者は来づらいという点だった。ま、いつの世も独り者は迫害されるものだ。
さて、その日もまだ昼間だというのに、ヤーレン公園はカップルで満たされていた。
あっちでもこっちでも、ハートマークが飛び交い……わっ、ちょっと、そんなことまで！　あ～、大胆！　うわ～、目の保養！　…
…なんてことが繰り広げられている。
そこに彼女が現れたのだった。
シャナリ、シャナリ……

ウエーブのかかったブロンドヘアの美女だ。
腰はキュッとくびれていて、ピッタリのタイトスカート。
そして、なによりも、ビキニに包まれた、はち切れんばかりの巨大なオッパイ！
でかい！　でかすぎる！
まさにダイナマイトボディ！
「うふ～ん」
その胸をユサユサ揺らしながら歩いてくる彼女の姿に、カップルの男たちのほうは思わず目を奪われた。
相手の女の子たちはムッとなる。
が、まだこれだけでは済まなかった。

爆れつ場外乱暴!!　「あかほりさとる・のわんちゃって・SAY　YOU！＝ここ掘れチワワ、茶碗割って醤油（意味なし!!）」（神奈川県・月下仙人）　こりゃホントに意味ねーなー（笑）。でも、シュールでけっこう笑える。「月下仙人」も掲載２回目。「23日～」と同じく、次回以降が勝負というところだな。

「あは〜ん」

プリン、プリン、プリン、プリン！

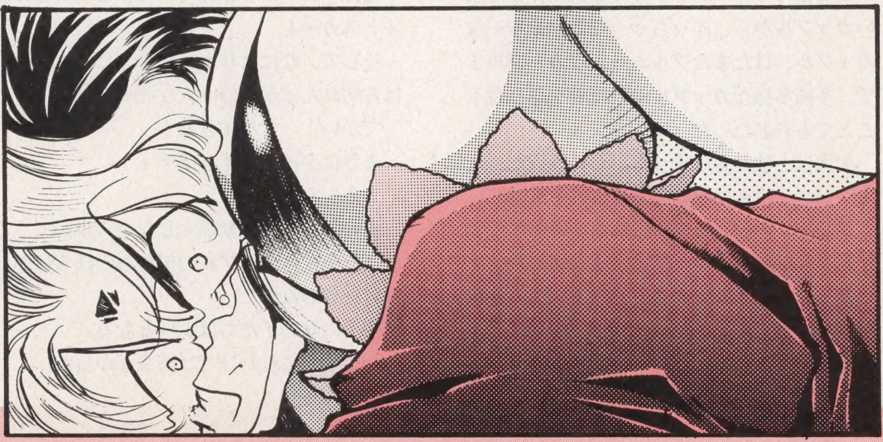
深い谷間を利用して、彼女は両方のオッパイをぶつけるように大きく動かした。
すると、どうだ。
なにかいい香りが漂ってきたではないか。
「あ……」
「おお……」
「なんと……」
不思議な感覚が周囲の男たちを襲う。
今までそのブロンド美女に見向きもしなかった男たちまで、パートナーの女の子を捨てて、彼女のまわりにフラフラと集まってきた。
公園中の男たちを集め、その中央で彼女は言った。
「ねえ、みんな、恋してるぅ？」
「はぁ〜い！」
「だれに？」
「あなたにで〜す！」
その言葉を聞いた瞬間、怒り心頭に達した女たちが男たちに襲いかかった。
「きぃぃぃぃぃぃぃぃ、なんですって！」
「うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「この浮気者！」
「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「男なんてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
「どわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

ドテッ、ボキッ、ドカッ、バカッ！

さっきまで幸せの園だった公園は、嫉妬に狂った女たちのおかげで、今や阿鼻叫喚（あびきょうかん）のこの世の地獄と化していた。
ただし、男たちにとってだけ……。
まわりの凄まじいケンカを見ながら、ブロンドの美女は悠然と微笑んでいた。
「ウフフフフ……」
その後ろに立つ影がある。
「よくやったぞ、ユーワク魔術師プリンプリンよ！」
ゼリー・フィッシュであった。
そして、このブロンドの美女こそが、今回のフィッシュ一族の怪人法族（ソーサラー）なのである。
「うふん、ゼリー様、ほめてくださいますぅ？」
「もちろんだ！　おまえの香水魔法でもっともっと男女の仲を引き裂くのだ！」
プリンプリンはオッパイをこすり合わせることで、魔法の香水を出すことができるのだ。この香りによって、男たちはプリンプリンの虜（とりこ）になってしまい、相手の女性を無視したり罵倒（ばとう）したりしてしまうのである。
「フフ……この調子でカップルや夫婦の間を引き裂いていけば、帝都は大混乱に陥ること間違いなし！　そこを狙って、一気に帝都を制圧し、世界征服の第一歩とするのだ！」
さっそうとカッコをつけようとしたゼリーだが、いきなりプリンプリンに抱きつかれてしまう。
「うふ〜ん♡」
「わー、なんだ、なんだ！」
「ほめてくださったんだから、ゼリー様ぁ！　ご・ほ・う・び・♡」
「わー、やめろぉ〜！」

ドテッ……

「うふ〜ん、美形大好き〜♡」
ゼリーはそのままその場に倒れ、迫ってきたプリンプリンの巨大な胸に押しつぶされていた。
うらやましい……。



5

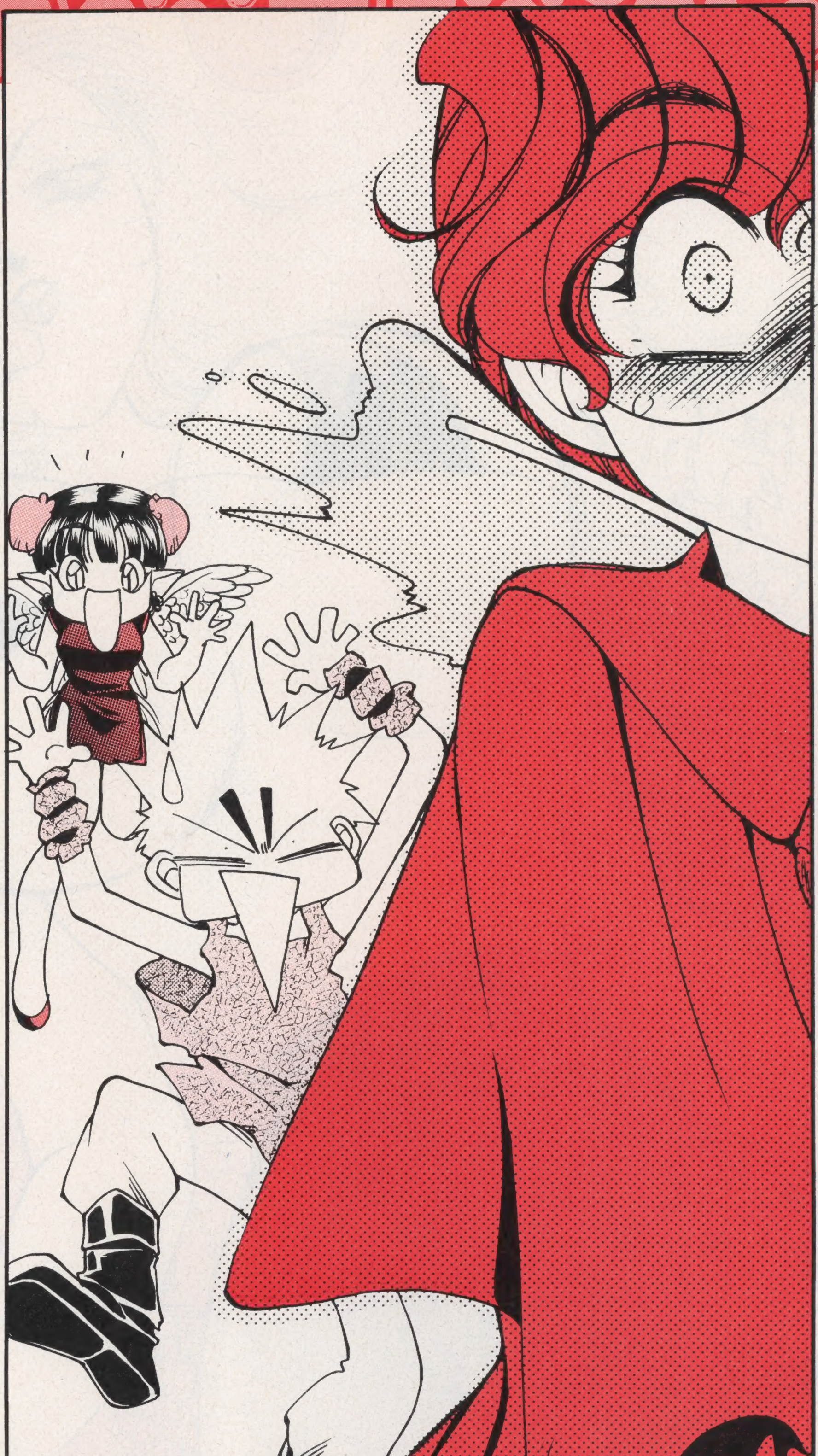
「え〜と、え〜と……あら？」
ティラは自分でもそうとは意識しないうちにいつの間にか、ベルサー街に来ていた。
しかも、裏通り——あのエンゼルの通う服飾専門学校のそばだ。
（あ、あたしったら、ボーッとしている間にこんなとこに……!?）
専門学校の入口が視界に入るところにある。
「で、でも、せっかく来たんだから……会っていこうかな……」
せっかく来た、という理由を自分自身に必死に強調して、ティラはエンゼルが学校から出てくるのを待っていた。
遠目でも特徴的なエンゼルの姿はわかる。
「…………」
太陽は中空にあり、まだまだ暑い。
そんな中、ティラはじっと専門学校の見えるビルの陰に立ち尽くしていた。

ところで、もう一人ビルの陰に立ち尽くしている者があった。
彼の目は専門学校でなく、それを見つめるティラのほうを向いている。
なんとキャロットだ。
「ったく、ティラのやつ、この炎天下になに待ってんだよ」
なにを……いや、だれを待っているのかはなんとなく予想できるのだが、キャロットは意識的にその予想を無視した。
キャロットに言わせれば、別にキャロットはティラをつけてきたのではない。
偶然、自分が行こうとした方向にティラが向かっていただけ、ということだ。ここまで来てしまい、ここで足を止めたのもまったくの偶然、と自分に言い聞かせていた。
実にいじっぱりである。

ジリジリジリ……

太陽は容赦なく照りつけてくる。
ダラダラと汗が出るのも構わず、キャロットはじっとティラを見つめていた。
「！」
不意にティラがドキッと身体を動かした。
ティラの視線の先の専門学校から、黒い服の人物が出てきたからだ。

「……あいつか！」
　キャロットがムッとなってつぶやく。
　ティラはその黒い服の人物——エンゼルを見て妙にそわそわしている。声をかけようかかけまいか悩んでいるのだ。
　ついにティラが決意したらしく、ビルの陰から一歩踏み出した。
「…………！」
　そのときにはキャロットもティラのほうに向かって一歩踏み出していた。
　意識したわけでなく、まったく自然に身体が動いたのだ。
　そこへ——
「あ〜、こんなところにいた！　キャロット！　ティラ！」
　キャロットの後ろからかわいらしい声が響く。
　キャロットも、さらにティラもビクッとなって振り返った。
　そこにはパタパタと羽根を動かしてドーターが浮かんでいた。
「大変よ、フィッシュ一族が……」
　そこまで言ったとき、
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
　またもや悲鳴をあげて、二人はその場から一目散に逃げ出していた。
「きゃあ!?」
「ティラ……？」
　悲鳴にエンゼルも気づいたようだ。
　驚いたようにティラの逃げていく後ろ姿を見つめている。
「なんなのよ、今日はもう、いったい……？」
　二人の声に驚いて、ドーターは地面の上に尻もちをついていた。
　ドーターがようやく立ち上がったとき、目の前に立っていたのはエンゼルだ。
「ほえ？」
「キミはティラの知り合いかい？」
「え、ええ……そうだけど」
「聞きたいことがあるんだが、いいかな？」
　日頃の態度からは考えられないほど、優しい口調でエンゼルは言った。



爆れつ場外乱暴!!　「"ゴカイが5階で豪快に5回誤解した"ク、クドイ…。しかもコテコテ。まさに爆れつにふさわしい（笑）」（愛知県・なぜ魔をマと書くの?）　"ゴカイ"って沙蚕のことか？　だったら豪快なゴカイのほうが笑えるぞ。まあとりあえず初掲載おめでとう。今後も精進してダジャレ界のゴカイを目指せ（笑）。



6

「きーっ、このォ！　甲斐性なしのくせに！」
「ぎぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
「あたしを愛してるって言ったのはウソだったのねぇ！」
「のわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「スケベ！　スケベ！　このスケベ！　不潔よ！　変態！」
「どわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
　街のあちこちでカップルや夫婦間のケンカが起きていた。
　とはいっても、一方的に男が女にやられているだけだが。
「うふ〜ん」
　原因は通りを歩くブロンドの美女——プリンプリンである。

　プリン、プリン、プリン、プリン！

　プリンプリンが胸をこすり合わせるたびに、道の両脇の家でケンカが起こるのだ。
　香りなので、別に窓を閉めていようが、目を閉じていようが侵入してしまう。
　ここが香水魔法の恐ろしさであった。
「フフフ……いいぞ、いいぞ」
　プリンプリンの後ろをついていくゼリーが会心の笑みをもらした。
「もっともっと街を混乱させ、そこで一気に戦闘員を投入し、帝都を制圧……次期フィッシュ一族の総帥は私だ！　ゼリー様、天才！　ゼリー様、すっごぉい！　ゼリー様……」
「ねえん、ゼリー様、ごほうび〜♡」
　陶酔に浸ろうとしたゼリーだが、悩ましげな目つきでプリンプリンがこちらを見ているのを知って、慌てて我に返った。
「あとだ、あと！」
「う〜ん、い・け・ず」
　ちなみにゼリーについて言っておくと、ゼリーは決して女が嫌いなわけではない。ただ、彼にはそれ以上に好きなものがあった。
　それは自分だ。
　ゼリーは究極のナルシストだったのだ。
　美の基準はすべて自分！
（あんなでかい胸はどうも好かん……。やはり究極の美は私！　そう、私のようでなくては！）
　この究極のナルシズムのおかげでゼリーはプリンプリンの魔法の虜にならないで済んでいた。
「ほら、プリンプリン、作戦を続けろ！」
「はぁ〜い！」

　プリン、プリン、プリン、プリン！

　さらなる香りがまき散らされ、あたりの家からはケンカの物音が大きくなった。
　そのときだ！

　チャラッチャチャチャチャチャチャ〜！

　謎のテーマ音楽が響きわたる。
　おお、これは！
「むむっ、この音楽は爆れつファイヤー！　やはり出たか！」
　いつの間にテーマ音楽が完成したんだ、という疑問はこっちに置いといて、音楽の中、ゼリーたちの前方の屋根に五つの人影が現れた。
　彼らこそ、帝都を守る五人の勇士、爆れつファイヤー！
　今、さっそうと……あれ？　あれ？
「ん、なんだ？」
　一瞬、緊張して身構えたゼリーだが、あらっ、という顔になる。
　確かに現れたのは爆れつファイヤーの面々だったが、いつもと全然様子が違うのだ。
　名乗りを上げるリーダーの男（キャロットのこと）がまるで元気がない。
　キャロットは大きくタメ息をつきながら言った。
「ふぅ……よう」
「よう、って……なんだ、その気合いのなさは！　こっちまで気合いがなくなるではないか！」
「そうか……わりぃ、わりぃ」
　そう言いながらもキャロットはまたもタメ息をついた。
　チラッとティラを見る。
　慌ててティラは視線を外す。
「どうしたの、兄さん？」
「ダーリン……」

WANTED!

フィレオ=フィッシュ



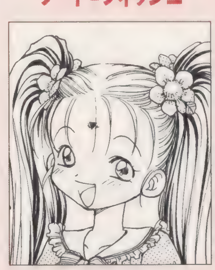
悪の法族「フィッシュ一族」の総帥。制服マニアがこうじて世界征服までもくろむおマヌケなオヤジ。正体、実力のほどはまだ不明。

オータム=フィッシュ



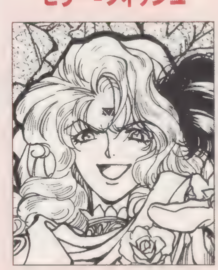
フィッシュ一族の長女。ケバケバな容姿と酷薄な性格はまさに悪の女帝。異母兄のゼリーと、一族の後継者をめぐって対立している。

ソード=フィッシュ



オータムの実妹。コケティッシュな容姿通り小悪魔的な性格。ニコニコとあまり意味もわからないままに、悪の野望の手伝いをする。

ゼリー=フィッシュ



フィッシュ一族の長男。一見オカマ的だが、性格もやっぱり陰険、自分勝手、無責任と三拍子そろった悪役。おマヌケさも父親ゆずり。

エンゼル=フィッシュ



フィッシュ一族の一員ながら兄妹とは一線をかくし、ゼリー、オータムとも仲が悪い。その過去、人柄は今のところ謎に包まれている。

「ティラもさっきからおかしいぜ」
　他の三人に言われ、キャロットとティラは慌てて首を振った。
「なんでもない！　なんでもない！」
「な、なんでもないわ！」
　五人とも、フィッシュ一族との戦いをすっかり忘れている。
　無視された格好になったゼリーは激怒した。
「くぅおら〜！　私は無視されることが一番嫌いなんだっ！　やれ、プリンプリン！」
「はぁ〜い！」

　プリン、プリン、プリン、プリン！

　巨大なオッパイから香りが立ち込め、キャロットたちに向かう。
「うおっ、この香りは！　身体が！」
　キャロットは叫ぶやいなや、屋根を蹴った。

　シュタタタタタタタタタタ……

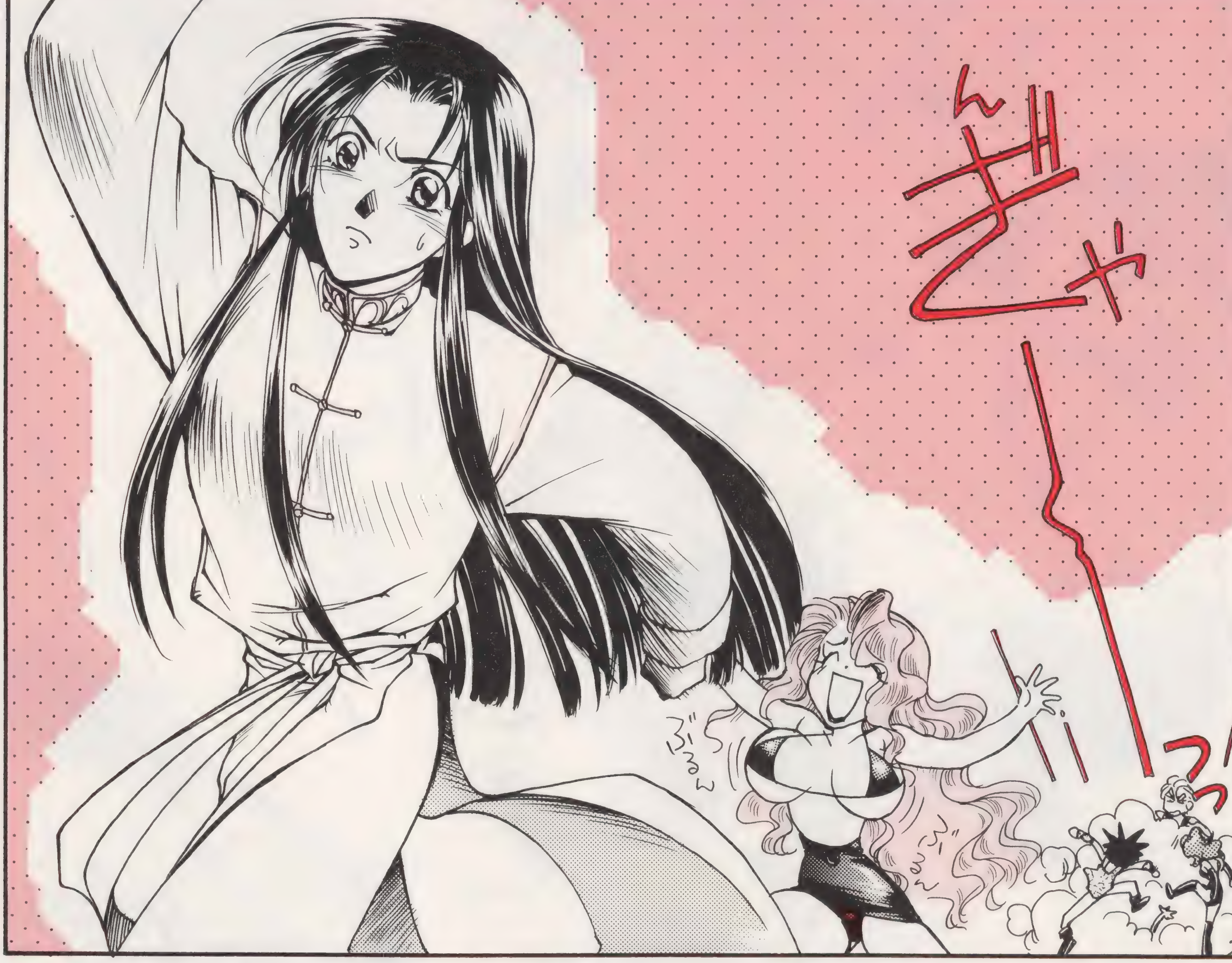
　そのまま地面に降り立つと、キャロットは一直線にプリンプリンの巨大な胸へと飛びついていく。
「うぉぉぉぉぉぉぉっ、この香り、たまらん！」
「うふ〜ん……あら？」
　だが、香りに誘惑されたのはキャロット一人であった。
　他のメンバーはキョトンとした顔で、プリンプリンやゼリーのほうを見ている。
　ティラとショコラは女だし、ガトーはゼリーと同じく超ナルシスト、そして、マロンはというと、バラしてしまえば女にはあまり興味がなく、極度のブラコンだ。
　この四人にプリンプリンの誘惑の香りは全然効かないのであった。
「なんだか知らないけど……ダーリン、浮気は殺す……」
「ホントよ！」
　ショコラの言葉にティラが大きくうなずいた。エンゼルとのことでいろいろあるが、基本的にキャロットが浮気することは絶対に許さないのである。
「さあ、いくぜ、フィッシュ一族！」
「…………」
　ガトーとマロンも構えをとる。
「はっ！」
　四人は屋根を蹴った。
　焦ったのはゼリーだ。
「いかん！　プリンプリン、なんとかしろ！」
「ごほうびは？」
「やる！　あとでなんぼでもくれてやるから、なんとかしてくれ〜！」
「はぁ〜い！」
　プリンプリンは上機嫌に、そのブロンドの髪を大きく振った。

　バサァァァァァァァァァァァァッ！

　ツーンとした刺激臭が向かってきたティラたち四人を直撃する。
「な、何!?」
「なんなの、このニオイは!?」
「うっ、身体が！　筋肉が！」
「しまった！」
　身体がしびれて、バタバタとティラたちはその場に倒れ込んだ。
　プリンプリンの胸にしがみついていたキャロットも、まるで殺虫剤を受けたゴキブリのように、地面の上で手足をピクピクさせている。
「うふふ……別に、男を虜にする香水ばかり出すわけじゃないのよ」
　プリンプリンが妖艶な笑みを浮かべて言った。
　プリンプリンの髪から発せられる香水魔法は他者の身体をしびれさせ、動けなくする効力があるのだ。
「よくやったぞ、プリンプリン……でも、私もしびれてしまったではないか！」
　ゼリーまでもがしびれて地面に転がっていた。
「じゃあ、ゼリー様からごほうびをもらうため、あなたたちの命はいただいちゃうわね」
　プリンプリンが短剣を取り出して、ティラたち四人に近づいた。キャロットを放っておいたのは、あとでどうとでもなると判断したからだろう。
「クッ……」
「動けねえ！」
　なんということだ。
　ただのお色気ネーチャンだと思われたプリンプリンの前に、爆れつファイヤー結成以来の大ピンチが！
　プリンプリンの振り上げた短刀が、陽光に輝く。
「あら……？」
　だが、なぜか短刀は振り下ろされなかった。







「むっ、プリンプリン、どうした!?」
いまだ身体のしびれがとれないゼリーが、顔だけプリンプリンのほうに向けて叫ぶ。
が、プリンプリンは動かなかった。
その顔が上気したように赤くなり、目が潤んでいる。
「すごい美形！　ス・テ・キ♡」
プリンプリンはマロンの顔を見つめ、ハフ〜というタメ息とともにそうつぶやいた。
倒れた拍子であろうか、マロンの顔からは仮面が脱げてしまっていた。

カラン……

プリンプリンはその場に短剣を捨ててしまう。
「お、おい、プリンプリン！」
「フィッシュ一族や〜めた！　もうゼリー様のごほうびなんて全然興味ないもん！」
「いっ!?」
プリンプリンはそのままマロンに迫っていく。
「ねえ、あたしを自由にしたくなぁい？」
「け、結構です」
「お願い、あたしを好きにしてぇ〜ん！」
「結構です！」
しびれたとか言っていられない。呪縛が解けたように、マロンはその場から走り出していた。
「待って〜！　ごほうびちょーだい♡」
プリンプリンが胸を揺らしながらあとを追いかけて行った。
残った者たちは唖然、呆然だ。
「なんだか、な……」
「ええ……」
ゼリーだけが地面の上で怒り叫んでいる。
「おのれ、裏切り者〜！」
ところが、そのゼリーを囲む四つの影が。
「いっ!?」
ようやくしびれのとれた、キャロット、ティラ、ショコラ、ガトーだった。
「フィッシュ一族、よくもやってくれたな！」
「あ、あれはプリンプリンがやったことで」
「問答無用！　やっちまえ！」

ドテッ、ボキッ、グシャッ！

「ぎぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
哀れ、ゼリーは四人がかりの袋叩きに遭い、ズタボロになってしまったのだった。
「正義は勝つ！」

爆れつ場外乱暴!!　「富永みーなさんが、いいことをしたときに先生が言いました。〝みなさんみーなさんを見習いなさい〟……。」（茨城県・せーき）　飲み屋でよく言われてんだろうな〜。ところでペンネームの「せーき」ってのは何かスゲーな。そういうつもりはないんだろうけど、どうしても考えちまうぜ、そっちを。

7

戦いが終わって、キャロットたちはステラ教団本部裏の宿舎に戻っていた。

マロンはまだ戻ってこないが、まあ、マロンのことだからそう心配はいらないだろう。

「あー、疲れた！　あたしシャワーを浴びようっと」

「オレも筋肉体操の続きを……」

ショコラとガトーが宿舎の中に消えた後、キャロットはティラを呼び止めていた。

「ティラ！」

（ドキッ！）

ティラは恐る恐る振り返る。

キャロットは真面目な表情をしていた。

「あ、あのな、ティラ……」

「は、はい」

「おまえにその、なんだ、聞きたいことがあるんだけどよ」

「は、はい」

そこからまた会話が進まない。

二人はじっと見つめ合ったまま、宿舎の玄関の前で立ち尽くしている。

が、やがて意を決したようにキャロットが口を開きかけた。

「あのな、おまえ、プールで……」

そのときだ。

「ティラ！」

涼やかな男の声が響く。

驚いて振り向いた二人の目には、黒い服で赤いピアスをした男の姿が飛び込んできた。

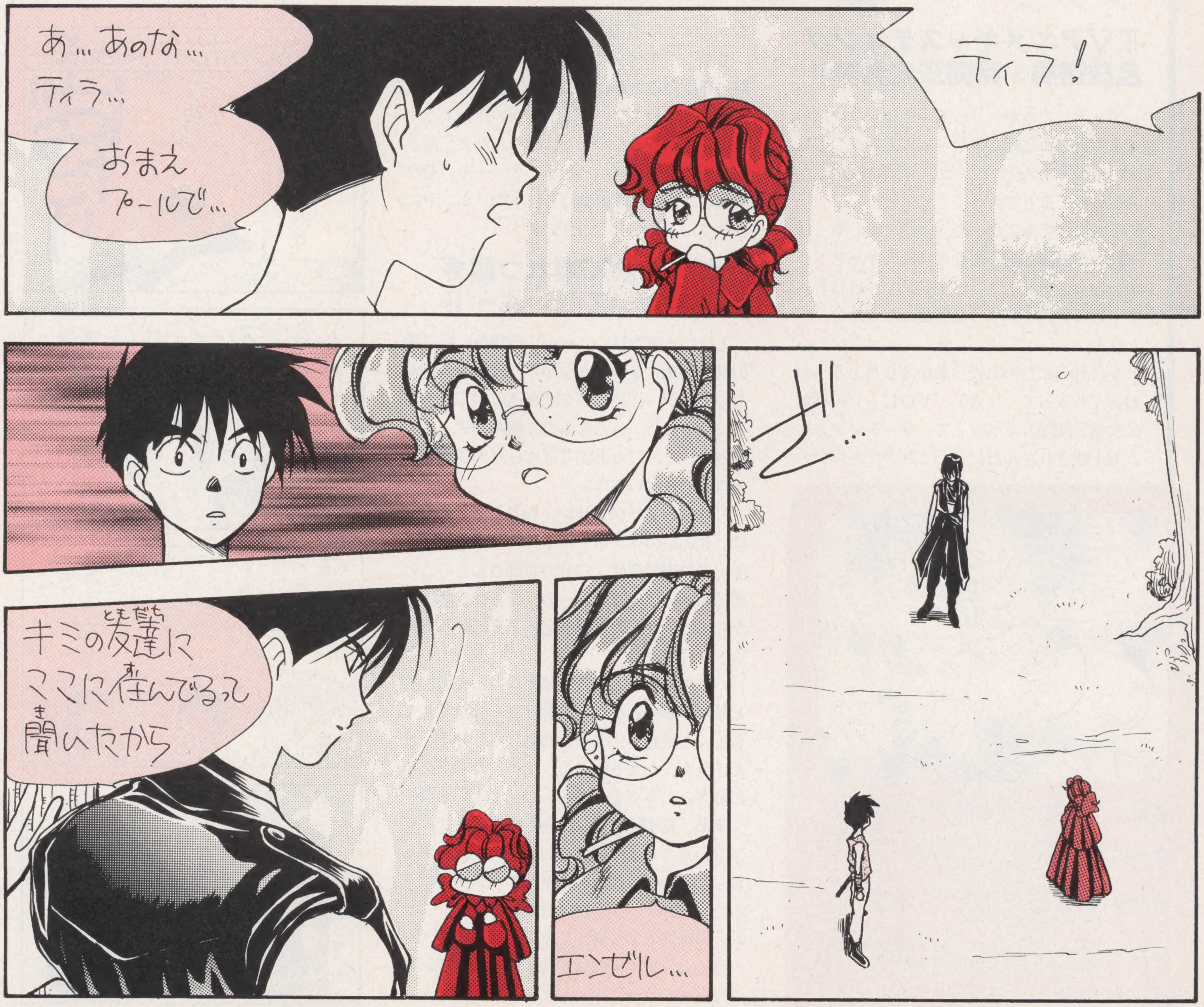
「おまえは……！」

「キミの友達にここに住んでるって、聞いたから」

「エンゼル……」

ティラとキャロットと、ちょうど三角形を作る位置にエンゼルが立っていた。

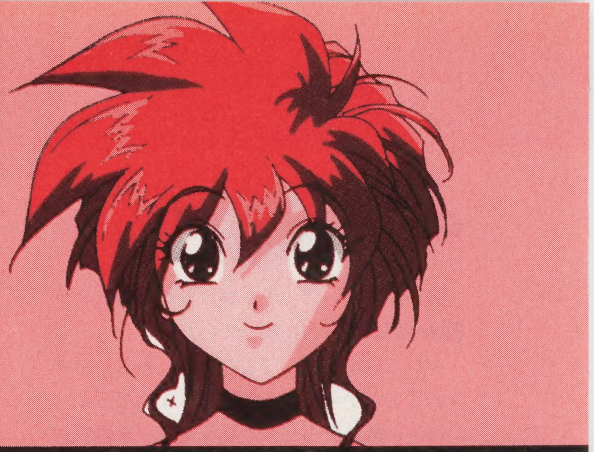
≪続く≫



「"アン・ドゥ・トロワ=アル中ショコラ" え？　ムリがあるって？　い〜んです！　それがダジャレなんですよ」（宮城県・ブルーゲイル）　ムリも何も何じゃそりゃって感じだよなコレ。でも「それがダジャレなんですよ」と言いきるあたりに将来性を感じて初掲載。みんな負けずにがんばるように！

MONTHLY DENGEKI BOMB!

月刊 電撃爆



まいった、まいった、ホントに入院だもんな〜、ってこのネタ、場外乱暴でもやったからもういいか。それにしても入院した方が仕事がはかどるってのはいったいどういうワケだ？　まったくオレってヤツは……。

TVアニメキャスティング&放送局・時間正式発表!!

エッチしてっかー!!っていきなりコレじゃ、まるで古本新之輔だよな〜。まあ爆れつTVアニメのキャスティングが、正式に決定したお祝いってことで許してくれよな。

それにしてもよかった、よかった。やっぱ爆れつが画面で動くんなら、このキャストしかないよ、ホント。ラジオドラマ、CDと、ずーとこの面子(メンツ)でやってきたんだもんな、うんうん。

9月10日に行われた「あかほりさとる　のわぁんちゃって　SAY　YOU！」の杉並公会堂公開録音イベントで、ラッシュフィルムも上映されたんだけど、これがまたいいの。もう、ほとんど立場忘れて興奮しちまったぜ。

もちろんすべてはスタッフ始め、関係者の熱い力添えのおかげ。本当に感謝してます。えっ!?　らしくないって？　いいんだよ、オレだって殊勝になるときはなるんだよ。ん？入院したせいじゃねーかって？……そ、そうかも…。でも感謝の気持ちは本物。ホントにみなさんありがとうございます。

まだまだ続く爆れつ騒ぎみんなついてこいよ〜!!

とはいえ実際は、これからが勝負。長丁場の制作作業もさることながら、放映中のみんなの応援が、作品に命を吹き込んでくれることになるんだ。みんな本当に頼んだぜ。

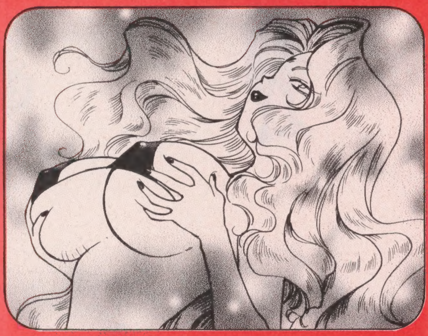
さあ、それじゃあぼちぼち今月の怪人さんのコーナーにいこうか。

今月の「プリンプリン」を考えてくれたのは、北海道のペンネーム・ショコラ水だ。アイデアの出発点は、自分のお姉さんとのこと。オイオイいいんじゃねーの、ショコラ水はただちにお姉さんの写真を送るように…ってそうじゃねーか。

ハガキによると、一緒に出かけると街の男どもが、みーんな自分のお姉さんを見るんで、ちょっと得意ですこーし悔しいらしいぞ。うん、うん、わかるわかる。まあ、とりあえずお姉さんの写真を…ちょっとしつこいかな。

まあ、基本的に爆れつ向きのキャラアイデアであることは間違いなし。必殺技の設定もおもしろいし、弱点もキャラのイメージにそったうまいアイデアだ。今度は「プリンプリン」の妹怪人でも考えてみてくれよな。

おっと、アニメの話が長引いてもう終わりになっちまうぜ。来月もよろしく頼むぞ〜。



名前▶	ユーワク魔術師プリンプリン
魔術▶	胸を擦り合わせて香水を巧みにかもし、その香りで世の男どもを虜にする
特技▶	髪からかもし出す香りで男どもを動けなくし、その間にとどめを刺す。
弱点▶	とにかく美形に弱い。美形を目の前にすると、使命など忘れ単なる美の奴隷と化す。
制作▶	北海道・ショコラ水。「私だって脱いでもすごいんです」とのこと。写真送ってこ〜い!!



4コマ／奥谷かひろ

おたよりのあて先：〒101 東京都千代田区　神田駿河台1－8　東京ＹＷＣＡ会館
電撃ＰＣエンジン編集部爆れつ〇〇係

メール オブ 爆

▼北海道・高都むう
人気急上昇のエンゼル登場。影のある美形は敵なし!?

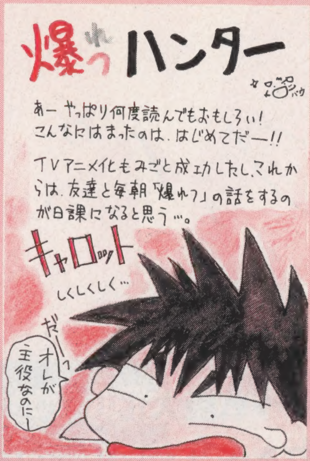




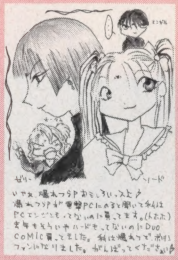
◀高知県・葉月せあら　今回葉月は掲載率がずいぶん高いらしいぞ。



◀宮城県・はかほりあさる　ペンネーム何とかした方がいいんじゃない。



▲千葉県・P－ちゃん　はまれ～はまれ～。アニメがオンエアされたらもっとはまれ～。



▶大阪府・またび天国　今月は常連ががんばってるような気がするな。



▶愛知県・水葉かりん　密かに人気上昇中のソード=フィッシュ。

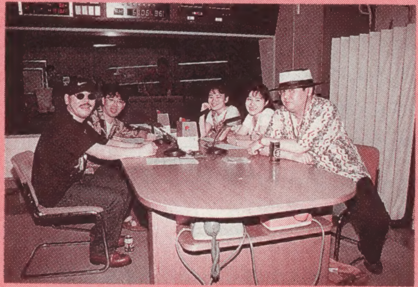
さあ、この号が発売されたら、すぐにアニメのオンエアとなるぞ。次号以降は、TVアニメ版のコスチュームのイラストも増えそうだな。はたして、アニメ版では、どのキャラが人気を奪うのか？　でもきっとキャロは…ダメ（?）。

スペシャルリンクス
あかほりさとる のわぁんちゃって まんがの森シアター SAY YOU! JOQR 出張版

公開録音も大成功に終わったこの番組。怖いものなしに思われていたポリリンに、思わぬ弱点が!?　それは昔の悪行を知っているお友だちだったのでした。

さすがは古い友人 ポリリンたじたじの巻

まずは9月2日放送分の、川崎ヒロユキさんと曾川昇さんを迎えた回のお話。



前週から引き続きのゲスト、丹下桜ちゃんの前で、言ってみれば裏も表も知りつくした友人の二人と対するポリリンは、もう完全にまな板の上の金魚状態。弱味をにぎっているのはお互い様のような気がする（?）のだけれど、なぜかいつも形勢が不利なのはポリリンとなってしまう。これも人徳のなせるワザと言えましょう(笑)。でも楽しそうなポリリンでした。

菊池通隆先生登場!!　ポリリンも約束が守れて一息

前々からゲストに招待しておきながら、なかなか実現せずに延びていた、菊池通隆先生の番組招待。危うくウソつきとなる寸前で実現したこの回だったけど、こちらも古くからのつき合いの二人、当然二人にしかわからないきわどい会話の連発となっていたようだ。

ただ、この日の菊池先生は、下の記事でも紹介している、松井菜桜子さんのエッセイ本の応援という大切な使命があったため（実は菊池先生は、この本のプロデュースを手がけてもいるのだ）、そこそこに休戦となって番組は無事終了したのでした。



でも、古くからのつき合いに弱いというあたりが、実は義理人情を大切にしているポリリンの人柄を表しているようで、収録後の大宴会（笑）も楽しいものになりました。

大注目!!　松井菜桜子 エッセイ集

声優・松井菜桜子の、波瀾万丈人生を笑いでつづるおもしろエッセイ「何てこったい!?」が、この号と同じく9月30日に発売されました（定価：1300円・税込　発行：メディアワークス　発売：主婦の友社）。

カバー、口絵、フォト&CGワークを、菊池通隆氏が担い、バラエティに富んだエッセイに、業界のウラ話も目一杯詰めてお贈りする、ファンならずとも必読の1冊。売り切れ前に書店へ走ろう!!



次ページで9月10日公開録音イベントをレポート!!

SAY YOU! スペシャル

放送回数を重ねるにつれ巨大化していく、驚き番組「のわぁんちゃって SAY YOU！」。今年も恒例の公開録音イベントが、9月10日杉並公会堂で行われた。本誌の読者には興味津々のその内容を、お届けするぞ!!



まさにお祭り騒ぎ!! 怒濤のツッコミ合戦開始

本誌読者にはおなじみの同番組。その公開録音といえば、観客が我れ先にとポリリンにツッコミを入れることで有名なものだよね。

ところが今回は先手を取ったのはポリリン。な、なんとゲストの川崎ヒロユキさんとコンビを組んで、漫才をやってしまったのだ。それも自分の奥さん（北川みゆきさん）ネタを!!



▲ゲームトークではとんでもない猥（わい）談も!!



▶放送できないぐらいきわどい話が、ひっきりなしに展開される。文化放送さんもタジタジ。

ポリリンの開き直り攻撃 はたしてその結果は!?

ツッコミを許さないポリリンの開き直りに、ゲストの林原めぐみさん、古本新之輔さん、折笠愛さん、松本保典さん、そして元祖コンビの水谷優子さんもタジタジ。

夫婦の危機までささやかれそうなギャグの中、ポリリンの作戦勝ちかと思われたそのとき、相方の川崎さんからアドリブが入る。

「奥さんに愛してるって言えよ」。

当然こっから先のポリリンはメロメロ。やっぱり最後はみんなのツッコミを受けることになったのでした。



◀歌のコーナーも大盛り上がり。「ミップル」にも熱い声援が飛びました。

もちろんイベントはこの漫才だけではなく、水谷さんや林原さん、折笠さんの歌、そして「爆れつハンター」ＴＶアニメのラッシュフィルム上映、ゲスト声優陣によるゲームトークなど一度も会場がひくことなく楽しく進行。

特にラッシュ上映では、そのフィルムのクオリティに観客も大盛り上がり。ますますアニメの期待が盛り上がったのでした。